

## 川端康成「乙女の港」略校異

刊本第一～九章

大森郁之助

川端康成の長篇少女小説の代表作「乙女の港」(昭12・6～13・3『少女の友』)の定本とすべきものは、新潮社版三十七巻本全集第二十卷(少年少女小説篇の第二卷)収録本文かと思われる。これは、少年少女小説篇の首巻にあたる十九巻の解題によれば

少年少女小説では、時勢の趨くところ、年々、漢字の使用量は局限され、仮名遣はいくたびか指令が出されて、文部省の方針に従つた表記法を各出版社(略)では採用して、しかも各社各様に書き改めたため、著者の表記は最初の型を全く跡を止めない程に、改められてしまつてをり、しかもどれも一致しないままちな本文が、刊本の数だけ存在することとなつてしまつた(以下略)

実態に鑑みて、全集の他の巻のごとくに作者生前の最終刊本を底本とはせず、初刊本(昭13・4実業之日本社)を底本とし、「発表誌を参照して、本文を作成」したものである。

本「校異」は右全集本文を以て、現実の初刊本の校正の精度を高めた、いわばあるべかりし初刊本文と見做し、これに初出本文を対比したもので、本篇には刊本全十章中第九章まで(初出誌十三年二月号までの掲載分)を収めた。使用初出誌各号はそれぞれ次の収蔵に懸かる。

十二年六～八、十～十二月号 三康図書館

十二年九月号 日本近代文学館

十三年一、二月号 実業之日本社

社内資料としての収蔵誌のコピーを快よく供与された同誌発行所実業之日本社と、衝に当たられた総務部中田広二氏の御好意にあらためて謝意を表す。なお、印刷の便宜上漢字は両本文共用字体に改め、またルビは原則として削除し対比の対象外とした。

## 【全集の頁・行、本文】

9・1 一 花選び

4 駈け寄つて

5 人びと。

8 それを

8 蔭

9 してゐる。

10 一年生は、オチビさん

12 親しみにくくて厭ア

## 【初出形】

1 花選び

(改行ナシ)

人びと。……

(改行ナシ)

陰

してゐるのだつた。

一年生はオチビさん

親しみにくくて厭あ

- 10・12 あれくらゐが  
薄暗い窓際
- 7 胸に、そつと
- 8 入れたりして、なにか  
撫でたりして、出て  
ひとつ……。
- 11・2 どうぞ——。
- 2 私の花束を  
生ひある、  
捨てられ
- 12 沙羅  
褐色
- 13 落ちたり、  
さらの木の花。
- 5 五年
- 6 木蓮  
言葉が
- 9 その手紙は
- 11 手紙の中に、高くかをつて  
三千子は
- 15 出てくる、あの森の精  
そこにもう一つ、  
感じる。それなのに、  
けれど、
- 13 三千子は  
3〜4 (行間)
- 18 あれくらゐで  
薄暗い広間の窓際
- 7 胸にそつと
- 8 入れたりしてなにか  
撫でたりして出て  
ひとつ。
- 11 三千子はいちどきに  
(改行ナシ)
- 2 (改行カ?)  
生ひあるる (註2)  
すてられ  
褐色 (註3)  
沙色  
落ちたり (、ナシ)  
沙羅の木の花 (。ナシ)  
四年 (註4)
- 4 (改行)  
言葉は  
(改行ナシ)  
手紙の中に高くかほつて  
(改行ナシ)  
出てくる森の精  
そこにはもう一つ、  
感じるそれなのに、  
けれど、
- 13 (改行ナシ)  
(行アキナシ)
- 14 なんて  
まはり
- 15 四年 (註5)
- 12 周 (改行ナシ)
- 7 二年 (註5)
- 14 克子  
ついこの間  
どうしたら
- 15 脂肪取り
- 7 言ひ  
と、経子が
- 15 ささやいた。  
その花のことでね。
- 16 小学部——予科 (註6)
- 15 何年も、この  
と、経子に
- 2 言つて
- 16 言ひ方  
怒りんぼうぢやア。  
マアフリーが、まだ  
募るばかり——。
- 13 折つてゐる。  
あるけれど、  
Present (・ナシ)
- 17 折つてゐた。  
あるけれど、  
Present (・ナシ)  
専門の授業である。  
時間が一年生  
苦手だつた。  
唇  
Present (・ナシ)
- 18 唇  
Present (・ナシ)
- 19 唇  
Present (・ナシ)

- 8 アイコさん。  
愛子——。
- 14 愛子——。
- 15 そして、
- 18 rain.
- 19・2、4 rains.
- 6 Rain (雨) は
- 10 風に、会話で
- 12 者もある。
- 20・1 唇を真似る。  
迎への自動車
- 4 迎への自動車
- 10 だつたかしら。」
- 12 いたしまして。
- 12 あのひとに、ハム・パン
- 16 向うで、自分に
- 16 ことに、気づいたけれど、
- 18 残るばかり……。
- 19 マアフリーは、生徒
- 19 知らん顔で、十分
- 21・1 閉ぢた。
- 6 経子さんは、どこに待つてる
- 8 家は、電車で
- 8 来られ
- 8 向う
- 11 駈けつけて、学校の
- 12 俄雨で
- 12 一年生。
- アイコトさん。  
愛子であつた。
- (改行ナシ)
- rain (・ナシ)
- rains (・ナシ)
- 雨は
- 風に会話で
- 者もあつた。
- 唇を真似てゐる。
- (改行ナシ)
- だつたかしら……。(「ナシ)
- いたしまして、
- あのひとにハム・パン
- 向うで自分に
- ことに気づいたけれども(、  
ナシ)
- 残るばかりだつた。
- マアフリーは生徒
- 知らん顔で十分
- 閉ぢた(。ナシ)
- 経子さんはどこに待つてゐる
- 家は電車で
- 来れ
- 向ふ
- 駈けつけて学校の  
(改行ナシ)
- 一年生であつた。
- 17 お家の方、初めて
- 18 まあ、
- 22・4 いけませんたら。
- 4 日になさい。
- 10 さう言ひ残して、
- 11 うしろから、なんとなく
- 14 誘ひこまれるやうに、こつくり
- 18 日頃
- 23・5 ひとは、あたり
- 5 なかへ、三千子
- 8 と、廊下を
- 9 待つた
- 10 ささやいた。
- 11 言ふ
- 14 五年
- 16 素敵
- 17 言ひ
- 24・3 ひとは、あたし
- 5 五年
- 5 いろいろと有名
- 8 のに、お互ひに
- 10 その夢のやうな
- 19 やうに、明るく
- 25・2 うなづいた。
- 5 三人
- 6 もうぢき私の
- 9 行くの、見た
- お家の方初めて  
まあ、
- いけませんたら、  
日になさい、
- (改行ナシ)
- うしろからなんとなく  
誘ひこまれるやうにこつくり
- (改行ナシ)
- ひとはあたり  
なかへ三千子
- (改行ナシ)
- 待つた
- 囁いた。
- 云ふ
- 四年
- 素的
- 云ひ
- ひとはあたし
- 四年
- いろいろ有名
- のにお互ひに
- そのやうな夢の  
やうに明るく
- こつくりした。  
(註?)
- 四人
- もうぢき、私の  
行くの見た

26・15 町に、眼を  
 26・1 二 牧場と赤屋敷  
 6 言つてら。  
 27・10 痛くなつて。  
 27・3 帰りに、町の  
 4 なつて、さつさと  
 6 お兄さま。  
 28・4 日頃、大きい  
 5 取り上げ  
 6 そこへ、ぶんぶん  
 9 好き  
 11 お仏壇に、あんな  
 12 お仏壇に、ぱあつと  
 14 明るくする、光りの天使……。  
 18 三千子も  
 29・8 お母さま。  
 13 言つて  
 13 だから、行つて  
 30・4 糸  
 6 喜んでるんだね。  
 8 お兄さま  
 14 不断と  
 16 いただいた  
 17 沁みる  
 31・4 花盛り。  
 5 名も知らぬ  
 7 牧夫さん

町に眼を  
 II 牧場と赤屋敷  
 云つてら。  
 痛くなつて……  
 帰りに町の  
 なつてさつさと  
 お兄さん。  
 日頃大きい  
 取りあげ  
 (改行ナシ) そこへぶんぶん  
 (註8)  
 お好き  
 お仏壇にあんな  
 お仏壇にぱあつと  
 明るくする、光りの天使である。  
 (改行ナシ)  
 お母さん。  
 云つて  
 だから行つて  
 糸  
 喜んでるんだね、  
 お兄さん  
 不断の  
 いた、いた  
 沁みる  
 花盛りである。  
 名知らぬ  
 (註9)  
 牧夫さん

32・17 向う  
 17 言ひ出し、  
 5 言つた、  
 15 「あの頃  
 ぢやア、  
 17 出来たら、貰つて  
 33・2 洋子は、三千子の  
 7 言ふけれど。  
 11 清らかな、お乳  
 34・5 と、洋子は  
 9 愁への顔  
 11 お乳を搾れる  
 19 言ひつこ  
 35・11 と、三千子は  
 13 この次会つた時は、イに  
 14 三千子さんも、知つて  
 15 と、洋子は  
 17 言つた  
 18 アラクネ。  
 36・2 ギユピタア  
 6、8 糸  
 7 と、アラクネの  
 37・1、4 四年  
 4 五年  
 9 達者で——  
 9 評判を、裏返す

向ふ  
 云ひ、  
 云つた、  
 「その頃  
 ぢやあ、  
 出来たら貰つて  
 洋子は三千子の  
 云ふけれど、  
 清らかなお乳  
 (改行ナシ)  
 愁への影  
 乳搾れる  
 云ひつこ  
 (改行ナシ)  
 この次はイに  
 三千子さんも知つて  
 (改行ナシ)  
 云つた  
 アラクネ……。  
 ギユピタア  
 糸  
 (改行ナシ)  
 蜘蛛、そしていつもの  
 三年  
 四年  
 達者で……  
 評判を裏返す

9	5	3	42 1	18	41 4	18	11	7	6	40 3	8	4	3	17	15	8	3	1	38 1	18	14	13	13	12	12	
言つて	言ふ	あたしのこと、いろいろ	とつと行き	行き逢ふ	枝が折れ	それから、	思はず	洋子が女学部に入つて、まだ	予科から	邸宅——。	下さるやう。	午後からは、苦手	いらつしやら	五年	味方	辱しめのなか	なにか	と、念を押して	唇	経子は、ふんと	あの方のお家と	それで	だから、あの方	なつたの？	言ふ。	と、経子が
云つて	云ふ	あたしのこといろいろ	とつと行き	行き会ふ	枝折れ	(改行ナシ)	(改行ナシ)	まだ女学部へ入つて	(改行ナシ)	邸宅である。	下さるよう。	午後からは苦手	ゐらつしやら	四年	身方	辱しめなか	(改行ナシ)	(改行ナシ)	唇	経子はふんと	お家の	それが	だからあの方	なつたの、	云ふ。	(改行ナシ)

15	13	12	9	8	7	6	19	13	9	5	45 1、3	15	15	13	11	10	5	4	2	44 2	12	11	7	5	2	12	9
照子は	グループは、	伸してゐた	と、笑はせて	なアんで	弱さなり、	ものいひ	と、経子は	言つて	このをかきな	言つて	言ふ	好きなのひとだ	新しい肌着の、	波の青さ	浮んで、	三 開かぬ門	知らされたの。	あきらめられた。	いらした	告白には、	ささやかれ	下さつたのよ。	言はない	と、次の	あつちへついたり、	むづかしい	
(改行ナシ)	グループが、	伸してゐる、	(改行ナシ)	なあって	弱さなり。	もの云ひ	(改行ナシ)	云つて	(改行ナシ)	云つて	云ふ	好きなのひとだ	新しい、肌着で、	(改行ナシ)	立ち上つて、	Ⅲ 開かぬ門	知らされて……。	あきらめられたの。	ゐらした	告白は、	囁かれ	下さつたのよ……。	云はない	(改行ナシ)	あつちへいつたり、	むづかしい	

47・18 ゐられるのが  
 3 経子たちは、あつけに  
 4 いらつしやる  
 7 言つてる  
 8 と眩くと、  
 12 いつ、そんな  
 14 あらア、  
 15 「あの方、董の  
 15 思つてたからなの。」  
 16 お名前云ふと  
 16 四年  
 16 五年  
 19 勝手  
 48・1 お手紙  
 3 ゐるのか。  
 4 放つ  
 6 その上、  
 6 言つて  
 11 と、経子は  
 11 言つたら、  
 13 受け取つて、レヴユウ  
 19 と、校舎の  
 49・4 おこして  
 6 来ちやふ  
 8 なほさなきや、  
 10 おこしてよ。  
 10 〇 (行間)  
 11

ゐられるが  
 経子たちはあつけに  
 ゐらつしやる  
 云つてる  
 (改行ナシ)  
 いつそんな  
 あらア。  
 「董の  
 思つてたの。」  
 お名前は云ふと  
 三年  
 四年  
 心のまま  
 お手紙を  
 ゐるか。  
 放つた  
 (改行ナシ)  
 云つて  
 (改行ナシ)  
 云つたら、  
 受け取つてレヴユウ  
 (改行ナシ)  
 「おこして<sup>(註10)</sup>  
 来ちやう  
 なほさなきやあ、  
 おこしてよ。」  
 〇

11 ねつてば。  
 11 〇 (行間)  
 14 「ああ。」  
 14 抱きしめてほしい。  
 50・1 中の兄  
 3 「薔薇は  
 10 言つて  
 11 言へない。  
 51・1 透き通つた  
 3 と、三千子は  
 6 と、今度は  
 9 光だけれど、  
 9 夏が、そこら  
 12 却つて  
 12 ぢつとしてゐられ  
 14 手入れを  
 15 はたかれたり――。  
 18 この廃屋の  
 52・2 物置の蔭  
 3 もつとこはく  
 6 と、隠れたまま言つて  
 7 お姉さま、お怒り  
 8 しをしをと  
 10 まあ、  
 11 洋子は  
 13 と、言ひ  
 ねつてば  
 (行アキナシ)  
 「ああ」  
 抱きしめて抱きしめてほしい。  
 仲の兄  
 (改行ナシ)  
 云つて  
 云へない。  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)  
 光は、  
 夏が、まだそこら  
 反つて  
 ぢつとしてられ  
 (改行ナシ)  
 はたかれたり、  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ) 物置の蔭  
 もつと、こはく  
 (改行ナシ)と、隠れたまま云  
 つて  
 お姉さまお怒り  
 しほしほと  
 まあ――。  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)と云ひ

- 53・1 19 18 15  
 言へ  
 言ひ  
 三千子は  
 (改行ナシ)  
 云へ
- 53・1 3 6 3  
 と、大きな  
 言へない  
 と、あどけなく  
 と、洋子は  
 (改行ナシ)  
 云へない  
 (改行ナシ)
- 54・4 18 13 6  
 と、三千子は  
 見つからないのぢや  
 と、洋子は  
 (改行ナシ)  
 見つからないぢや  
 (改行ナシ)
- 54・4 7 9  
 三千子は  
 持ちませぬやう  
 (改行ナシ)  
 私  
 持ちませぬやう
- 55・1 18 9  
 門を、お庭の  
 あたし  
 門をお庭の  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)
- 55・1 2 7 10  
 ぐるつと  
 と、洋子は  
 と、気取つて言つた。  
 (改行ナシ)と、気取つて云つ  
 た。  
 (註II)  
 生きてる  
 フオツクス  
 洋子が  
 云つて  
 玄関に  
 三千子は夢心地うなづいて、  
 もの珍らしげに、部屋中  
 云ふ  
 云つた  
 なくちやア
- 56・2 15  
 フオツクス  
 生きてゐる  
 フオツクス  
 洋子が  
 云つて  
 玄関に
- 57・5 16 9 4  
 三千子はうなづいて、  
 玄関を  
 言つて  
 云つて  
 玄関に
- 58・7、10 8  
 言つた  
 なくちやア
- 59・3 19 16 12  
 三千子は嬉しさう  
 をかしい  
 婆やの御自慢  
 言つて、  
 ビーフ  
 (改行ナシ)三千子は思はず嬉  
 しさう  
 (二行分アキ)  
 三千子を送り  
 (改行ナシ)  
 山手の坂に、つつましい  
 云つた  
 気持も大人に  
 そんなこと云つた  
 云へない  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)  
 お父さまはなんにも  
 云ふ  
 云ふ  
 お張面  
 (改行ナシ)三千子はなんと云  
 つて  
 牧場にもそんな  
 云つた  
 婆やね、  
 (改行ナシ)  
 云ふ
- 60・3 18 17 12 8  
 言へない  
 妙なこと言つた  
 気持も大人に  
 言つた  
 山の手の坂につつましい  
 言つた
- 61・1 19 17 16 9  
 言ふ  
 お父さまは、なんにも  
 と、洋子は  
 それはさう  
 言ふ  
 お張面  
 (改行ナシ)三千子はなんと云  
 つて
- 62・5 12 6 5  
 言ふ  
 と、洋子が  
 言つた  
 婆やがね、  
 言つた  
 牧場にもそんな  
 云つた  
 婆やがね、  
 (改行ナシ)  
 云ふ

63・1 と、洋子も  
 14 洋子は  
 12 お姉さまが偉過ぎる  
 9 言った。  
 6 お姉さま。  
 2 開港  
 5 言はれ  
 7 誰かの家の静かな庭  
 8 嫌ひ  
 9 と、三千子はまた言った。  
 12 ろよう  
 15 山の手  
 64・3 言った。  
 6 なにか知らない  
 7 四 銀色の校門  
 11 三千子は  
 15 言ひながら、鋏を  
 65・1、4 お母さま、  
 5 それほど  
 8 着られる  
 9 と、三千子は  
 10 針箱  
 11 五年生

お姉さま、  
 云った。  
 お姉さまが、偉過ぎる  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)  
 (二行挿入)洋子と三千子は、  
 外人倶楽部のテニスコートの  
 方へ下りて行つた。  
 港開  
 云はれ  
 静かな庭  
 厭ひ  
 (改行ナシ)と、三千子はまた  
 云つた。  
 ろやう  
 山手  
 云つた。  
 (改行ナシ)  
 IV 銀色の校門  
 洋子は<sup>(註14)</sup>  
 云ひながら、ぢぎぢぎ鋏を  
 母さま、  
 それほどに  
 着れる  
 (改行ナシ)  
 鉢箱  
 四年生

66・2 浴衣なんか、差上げる  
 19 と、三千子は  
 17 三千子は八木さん  
 14 と、三千子は  
 13、16 お母さま。  
 7 総模様の、見るからに、  
 4 言ひ  
 3 店だ  
 3 間に  
 3 店だ  
 3 言ひ  
 9 覚えぬ洋子  
 11、14 お母さま、  
 13 いふのに？  
 16 静かさ……。  
 67・1 言ふ  
 3 と、母は  
 6 お母さま。  
 8 らつしやるんです  
 12 あると、お話し  
 15 三千子に  
 15 三千子に  
 15 言つた。  
 68・2 お母さま  
 3 と、三千子は  
 9 学校に  
 11 と、呼ばれて  
 69・9 正直な道子の言ひ方

母さま。  
 (改行ナシ)  
 三千子は、八木さん  
 (改行ナシ)  
 浴衣なんか差上げる  
 竹仙  
 間には  
 店のだ  
 言ひ  
 総模様の見るからに、  
 覚えぬやうな洋子  
 母さま、  
 いふのに……？  
 静かさ……。  
 いふ  
 (改行ナシ)  
 母さま。  
 らつしやるんです  
 あるとお話し  
 三千子を  
 云つた。  
 母さま  
 (改行ナシ)  
 学校の  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)正直な道子の云ひ



70  
 11 11 いただくために  
 15 15 起きるのだね。」  
 1 と、洋子が  
 「克子」と、はつきり  
 5 理智的  
 7 と、道子は  
 9 四年生  
 13 と、克子が  
 15 ありがと。  
 18 唇  
 71  
 4 落度ばかり、覗つて  
 10 唄つてゐる。  
 12 糸杉  
 12 三千子——。  
 14 唄ひ  
 18 言つて、  
 72  
 2 朝日のなか  
 4 と、洋子は心にささやいて、

方  
 いただくに  
 起きるのだね。」  
 (改行ナシ)  
 「克子」てはつきり  
 理智的  
 (改行ナシ)  
 三年生  
 (改行ナシ)  
 ありがと。  
 唇  
 落度ばかり覗つて  
 唄つてゐる。(。ナシ)  
 糸杉  
 三千子……。  
 歌ひ  
 云つて、  
 真似の  
 朝日のおか  
 (改行ナシ)と、洋子は心に囁  
 いて、  
 堪へ  
 (改行ナシ)  
 高原  
 踏みわぶ  
 (改行)  
 御坂越ししより<sup>(註9)</sup>

73  
 16 16 なほ深からむ  
 2 ばかり——。  
 4 珍らしく  
 6 荒い岩  
 7 ギザギザ  
 12 いらつしやる  
 13 と、三千子は  
 14 知つた方にお会ひ  
 18 二人  
 18 出た  
 74  
 1 言へます?  
 3 三千子は  
 3 真面目  
 7 伯母さまは  
 9 ——三千子は  
 1 1 いいわ、  
 5 棄てられて——。  
 17 桜の花  
 19 初めて。  
 76  
 1 と、三千子は  
 2 お道具  
 4 弥次喜多  
 4 さう言へば、弥次喜多さん  
 5 参観交代  
 7 町本通  
 9 と、真先に  
 11 と、店のをばさん

(改行)  
 ばかり……。  
 珍しく  
 (改行ナシ)と、荒い岩  
 キザキザ  
 いらつしてゐる  
 (改行ナシ)  
 知つた方にお会ひ  
 二千五百人  
 出た  
 云へます?  
 (改行ナシ)  
 生真面目  
 (改行ナシ)  
 ……三千子は  
 い、わ、  
 棄てられて……。  
 桜の花  
 初めて——。  
 (改行ナシ)  
 道具  
 まるで野次喜多  
 さう云へば、野次喜多さん  
 参観交代  
 町本通  
 (改行ナシ)  
 (改行ナシ)と、店のおばさん

- 77・5 13 可愛い。  
人形が三千子の便りを、ぶら下げて
- 77 11 可愛い。  
人形がぶら下げて
- 78・1 14 毛糸  
11 洋装か、日本着物の盛装で  
14 毛糸
- 78 4 4 と、三千子の  
4 本町通
- 79・2 15 と、克子は念を  
8 と、克子はさも  
15 言った。
- 79 4 4 克子はもう町に  
4 五六人美しい  
4 行く。見送つて  
7 言ふ。
- 80・2 18 と、小声で  
12 三千子は  
12 こぼれ落ちて、三千子は  
10 三千子は、早速  
8 檀や朴や楡の  
7 言ふ。
- 80 7 カトリック教会  
14 と、もう卓の傍に  
15 スポオツ
- 81・5 9 返事のしよう  
9 言ふ
- 81 9 返事のしやう  
9 言ふ
- 82・1 19 日光に、帽子も  
18 間近  
17 この機会を  
14 と、克子に
- 82 4 私  
6 言ひ  
7 分らないから、恥しくない  
10 三千子は  
12 私
- 83・1、3、15 私  
12 ほんたうに、三千子も  
13 三千子も  
84・3 おまじない  
85・2 言はれ  
7、8 御膳水  
11 沿うて、
- 83 12 私  
10 三千子は  
7 分らないから、恥しくない  
12 ほんたうに、三千子も  
13 三千子も
- 84・3 おまじない  
85・2 言はれ  
7、8 御膳水  
11 沿うて、
- 86・3 かうして、この路  
6 でも三千子さん  
12 言ひにくさう  
87・4 あたしにだけ、打ちあけて  
9 思ひ直した様に  
10 言つた  
11 下さるのですもの、  
12 仰しやる  
13 しをれたりなさつては、不似合
- 86 6 でも三千子さん  
12 言ひにくさう  
87・4 あたしにだけ、打ちあけて  
9 思ひ直した様に  
10 言つた  
11 下さるのですもの、  
12 仰しやる  
13 しをれたりなさつては、不似合
- 87 9 思ひ直した様に  
10 言つた  
11 下さるのですもの、  
12 仰しやる  
13 しをれたりなさつては、不似合
- 88 11 思ひ直した様に  
12 言つた  
13 下さるのですもの、  
14 仰しやる  
15 しをれたりなさつては、不似合
- 89 11 思ひ直した様に  
12 言つた  
13 下さるのですもの、  
14 仰しやる  
15 しをれたりなさつては、不似合

94・1	5	言つた	94・1	5	言つた	94・1	5	言つた
93・7	10	言ふ	93・7	10	言ふ	93・7	10	言ふ
92・4	12	ぢつと	92・4	12	ぢつと	92・4	12	ぢつと
91・1	6	早い	91・1	6	早い	91・1	6	早い
90・2	13	言はれる	90・2	13	言はれる	90・2	13	言はれる
89・1	11	萱葺	89・1	11	萱葺	89・1	11	萱葺
88・5	6	いらつしやる	88・5	6	いらつしやる	88・5	6	いらつしやる
87・7	7	言ふ	87・7	7	言ふ	87・7	7	言ふ
86・7	7	それから、	86・7	7	それから、	86・7	7	それから、
85・10	10	御心配なく	85・10	10	御心配はなく	85・10	10	御心配はなく
84・13	13	手紙とは、ちがふ	84・13	13	手紙とはちがふ	84・13	13	手紙とはちがふ
83・15	15	さみしい	83・15	15	さびしい	83・15	15	さびしい
82・1	1	知らされた	82・1	1	知られた	82・1	1	知られた
81・1	1	ペダルを踏んだ。	81・1	1	ペダルを踏んだが、	81・1	1	ペダルを踏んだが、
80・2	2	言はれる	80・2	2	云はれる	80・2	2	云はれる
79・13	13	跨がらせ、	79・13	13	跨がらせて、	79・13	13	跨がらせて、
78・15	15	心まで	78・15	15	心がまで	78・15	15	心がまで
77・1	1	六 秋風	77・1	1	秋風	77・1	1	秋風
76・6	6	早い	76・6	6	お早い	76・6	6	お早い
75・7	7	言つた。	75・7	7	云つた。	75・7	7	云つた。
74・8	8	不思議なくらゐる。	74・8	8	不思議なくらゐる……。	74・8	8	不思議なくらゐる……。
73・9	9	クロオバア	73・9	9	クロバア	73・9	9	クロバア
72・10	10	いらした。	72・10	10	ゐらした。	72・10	10	ゐらした。
71・12	12	行つてみます。	71・12	12	行つてゐます。	71・12	12	行つてゐます。
70・4	4	ぢつと	70・4	4	じつと	70・4	4	じつと
69・7	7	ぢつと	69・7	7	じつと	69・7	7	じつと
68・10	10	言ふ	68・10	10	云ふ	68・10	10	云ふ
67・1	1	牧師さまと、もつと	67・1	1	牧師さまともつと	67・1	1	牧師さまともつと
66・5	5	言つた	66・5	5	云つた	66・5	5	云つた
96・12	12	スポオツ	96・12	12	スポーツ	96・12	12	スポーツ
95・18	18	二十二時	95・18	18	二十時	95・18	18	二十時
94・5	5	言はれる	94・5	5	云はれる	94・5	5	云はれる
93・9	9	いちいち	93・9	9	いちいちく	93・9	9	いちいちく
92・3	3	言つたつて、	92・3	3	云つたつて、	92・3	3	云つたつて、
91・10	10	乗れなくちやア。	91・10	10	乗れなくちやア……。	91・10	10	乗れなくちやア……。
90・14	14	三千子	90・14	14	三木子	90・14	14	三木子
89・19	19	言ひ棄て	89・19	19	云ひ棄て	89・19	19	云ひ棄て
88・19	19	ペダル	88・19	19	ペダル	88・19	19	ペダル
87・1	1	取つて。	87・1	1	取つて……。	87・1	1	取つて……。
86・10	10	ならぬので、	86・10	10	ならぬので、	86・10	10	ならぬので、
85・14	14	言ふ	85・14	14	云ふ	85・14	14	云ふ
84・16	16	どうして、かう毎日	84・16	16	どうしてかう毎日、	84・16	16	どうしてかう毎日、
83・17	17	(行間)	83・17	17	(一行分アキ)	83・17	17	(一行分アキ)
82・6	6	可哀想	82・6	6	可哀さう	82・6	6	可哀さう
81・9	9	言ひ	81・9	9	云ひ	81・9	9	云ひ
80・9	9	言つたら	80・9	9	云つたら	80・9	9	云つたら
79・10	10	いふことが	79・10	10	いふことが、	79・10	10	いふことが、
78・11	11	言ひたげ	78・11	11	云ひたげ	78・11	11	云ひたげ
77・14	14	言ひたくて言へない。	77・14	14	云ひたくて云へない。	77・14	14	云ひたくて云へない。
76・4	4	自転車	76・4	4	自動車	76・4	4	自動車
75・9	9	メガホン	75・9	9	メガホオン	75・9	9	メガホオン
74・10	10	Next, ~girls.	74・10	10	Next, ~girls.	74・10	10	Next, ~girls.
73・11	11	言ふ。	73・11	11	云ふ。	73・11	11	云ふ。
72・13	13	Under ~women.	72・13	13	Under ~women.	72・13	13	Under ~women.
71・7	7	厭	71・7	7	いや	71・7	7	いや
70・11	11	羨ましい、えらいと	70・11	11	羨ましい。克子をえらいと	70・11	11	羨ましい。克子をえらいと

109・2 3 祭壇の真中  
 3 ささやいて、  
 17 並べて――。  
 108・2 3 午後。  
 107・3 4 しなくちや。  
 106・1 4 知らないで、  
 12、16 言ふ  
 11 次の日から。  
 7 逢ひ  
 7 言つて、  
 6 滲み出るやうだ。  
 5 「大きな困難と戦つてゐる」  
 105・1 16 灼けて、  
 16 しないやうに  
 13 あたし元気  
 104・6 18 凜凜しい  
 17 較べて？  
 15 来てみて？  
 13 言つて、  
 12 いいけれど。

いいけれど……。  
 云つて、  
 来てみて……。  
 較べて……。  
 凜々しい(註13)  
 「克子さんにも、いいところがある。」  
 あたしは元気  
 しないやうに  
 凜けて、  
 コホン  
 『大きな困難と戦つてゐる』  
 滲み出るやう……。だ。  
 云つて、  
 会ひ  
 次の日から……。  
 云ふ  
 云ふ  
 知らないでも、  
 調子なの……文法も  
 しなくちや……。  
 かけず  
 午後……。  
 並べて……。  
 子供の  
 囁いて、  
 祭壇真中

114・1、8 1 素敵  
 4 意地悪い  
 4 打ちのめすだらうこと  
 11 言つた。  
 113・1 17 素敵  
 112・10 15 退治ちやひ  
 111・3 19 一人でしか  
 18 言ふ  
 18 待つてエ  
 14 克子に  
 10 かぼそい  
 7 洗ふやうに  
 6 だから、余計  
 5 つい、うかうか  
 110・2 14 七 新しい家  
 11 歌ではない  
 4 長い棒

長い、棒  
 歌でない  
 新しい家  
 云ひつけ  
 つい、うかうか  
 だから余計  
 洗ふやうに……。  
 かぼそい(註14)  
 三千子に  
 まつてえ  
 云ふ  
 でせうね……。  
 一人しか  
 云ふ  
 退治ちやひ  
 お母さん  
 素的  
 いつまでも  
 うん。  
 注文  
 花を  
 ……さうして  
 云ふ  
 素的  
 強い  
 打ちのめすこと  
 云つた。

115・3 16 薄暗い廊下  
 115・3 3 克子  
 4 4 いい  
 6 6 みたいわ……。  
 7 7 いらつしやい。  
 7 7 あげる。  
 7 7 散歩してる  
 8 8 のぼつてゐる。  
 9 9 クリスマスには、もう  
 13 13 いただいて？  
 15 15 ——三千子さん、  
 15 15 お母さま  
 17 17 お報せを  
 18 18 二三日  
 116・3 3 二三日  
 3 3 お母さま  
 8、 8、 17 山の手  
 9 9 なんだか夜の  
 14 14 言へば、  
 15 15 不仕合はせで  
 17 17 却つて、  
 117・1 1 失つたことを喜んで  
 1 1 清らかに凜々しい  
 9 9 山の手  
 9 9 散歩する  
 11 11 私は悲しんで  
 11 11 あなたは

薄暗い曲がつた廊下  
 勝子  
 い、  
 みたいやうな……。  
 いらつしやいよ。  
 あげるよ。  
 散歩してゐる  
 のぼつて来る。  
 クリスマスにはもう  
 いただいて……。  
 ……三千子ちゃん、  
 母さま(註9)  
 お報せ  
 二・三日  
 二・三日  
 母  
 山手  
 なんだか、夜の  
 云へば、  
 不仕合はせでは  
 反つて、  
 失つたことを、喜んで  
 清らかに、凜々しい  
 山手  
 散歩すを  
 悲しんで  
 あなたはまだ

118・3 18 セン・ピエール  
 118・3 3 読めぬ、仏蘭西語と  
 6 6 直ぐ  
 15 15 のんきだから  
 119・5 5 落日  
 7 7 さやうなら、お日さま。  
 12 12 御一緒  
 14 14 絹糸  
 16 16 却つて  
 16 16 言ふ  
 19 19 おつしやいます——」。  
 120・3 3 三千子さん」。  
 7 7 着いたばかり」。  
 9、 9、 13 言つた  
 12 12 真先き  
 12 12 言ふ  
 19 19 面白いことが沢山  
 121・4 4 言ひ  
 6 6 待つてよ。  
 6 6 三千子さん、  
 9 9 競争」。  
 122・6 6 時  
 11 11 教会  
 14 14 言つて、  
 123・1 1 くぐつた。  
 6 6 こぼれる  
 9 9 これもと堰が

(前行へ)  
 読めぬと  
 直ぐと  
 のんきだから  
 落日(註9)  
 さやうならお日さま。  
 一緒  
 絹糸  
 反つて  
 云ふ  
 おつしやいます……。」。  
 三千子さん！  
 着いたばかり……。」。  
 云つた  
 最先き  
 云ふ  
 面白いことが、沢山  
 云ひ  
 待つてよ……。  
 三千子さん。  
 競争」。  
 日  
 教会の家庭  
 云つて、  
 くぐつた。  
 あふれる  
 これもと、堰が

127  
 1 面白くないし牧場との  
 5 迎へた門際の、古い  
 8 ナイフで小さく  
 9 いつまで、  
 12 八 浮雲

126  
 5 毛糸  
 6 仏蘭西  
 8 言つた。  
 10 言ふ、  
 13 三千子さんを  
 14 ぢつと  
 15 夏に、

125  
 1 びつくり  
 2 口調……。  
 4 お厭  
 7 ぢつと  
 12 言つた。  
 16 言ひ  
 18 あたしを

124  
 5 言ひ出せ  
 18 言ひ  
 13 人のもの。  
 13 ああ、  
 11 口には出し  
 9 言ふ

云ふ  
 口にはし  
 「ああ。  
 人のもの。」  
 云ひ  
 云ひ出せ  
 云つたつて、その誰とも云  
 つたつて、  
 びつり  
 口調。――  
 おいや  
 じつと  
 云つた。  
 云ひ  
 (改行ナシ)  
 毛糸  
 フランス  
 云つた。  
 云ふ、  
 三千子を  
 じつと  
 夏は、  
 面白くないし、牧場との  
 迎へた、門際の古い  
 ナイフで、小さく  
 いつまで生きて、  
 浮雲

128  
 5 言ふ。  
 8 四五人  
 10 五年  
 12 なつたのよ。その時、

129  
 1 なほる  
 4、19 言ふ  
 3 四年  
 12 人たちは。」  
 16 ないのかしら？  
 131 1 克子さんてば、  
 3 四五人  
 6 却つて  
 6 言ふ。  
 132 2 鬱陶しく、気が  
 9 国語 唱歌 (訳読)  
 9 (英语法)  
 10 地理 家政 (訳読)  
 11 国語 凶画 体操 (訳読)  
 12 五年  
 133 1 顛へさう――。  
 4 言つてる  
 5 かうやつて

云ふ。  
 四、五人  
 四年  
 なつたのよ。」／「まあ、凄い。」  
 ／「その時、  
 感心したつて……。  
 云つた  
 云つて、  
 なる  
 云ふ  
 三年  
 人たちは……。」  
 ないのかしら？  
 八木さんてば、  
 四、五人  
 反つて  
 云ふ。  
 憂陶しく気が  
 (訳読) 国語 唱歌  
 英文法  
 (訳読) 地理 家政  
 (英语法) 国語 凶画 (訳読)  
 体操  
 四年  
 顛へさう……。  
 云つてる  
 かうなつて



148  
7 19 16 16 13 11 10 10 7 6 5、 4 3、 15 13 17 12 8 5 19 16 16 15 12 5  
四年五年 青ざめ、 五年 四年 言つた。 なかなか 白組 パンを なにかにつけ 言つて 競走 3、7、10 経子 丘の上から永久に 克子さん 九 赤十字 などと、今度は、 と、背の高い 五年 大山さんのお詳しい 専門 威張つて と、ひとり 専門 威張つて と、ひとつでも言ふ 持つて、 言はぬ と、ひとつでも言ふ

つけて、  
云はぬ  
（改行ナシ）と、ひとつでも云  
ふ  
専問  
威張つても  
（改行ナシ）  
大山さんの、お詳しい  
四年  
（改行ナシ）  
今度は、  
（改行ナシ）  
赤十字  
永久に  
三・四日  
経子  
競争  
云つて  
なにかにつけにつけ  
パンの  
赤組  
なか／＼  
云つた。  
三年  
四年  
青ざめて、  
三年四年

150 11 洋子姉さま  
3 経子  
8 四年生  
8、15 競走  
151 12 競走  
14 父兄席  
14 当つたことのない  
152 2 汗ばむくらゐ……。  
7 天幕  
7 出て見た。  
18 五人、  
18 五年  
153 5 起き上れ  
19 倒れ  
12 洋子がさう  
10 やはり  
7 添つて……。  
2、4 天幕  
19 天幕  
11 ついた小麦粉  
19 天幕  
154 1 添つて……。  
2、4 天幕  
8 あんなに  
9 古い  
14 輪郭  
14 唇  
14 ばさばさと  
15 ねエ、

洋子さま  
経子  
三年生  
競争  
競争  
父兄妹  
当つたことのないやうな顔色  
の  
四年  
五人。  
汗ばむくらゐ……。  
天幕  
出てみた。  
やつぱり  
（改行ナシ）  
たふれ  
起上れ  
ついた、小麦粉  
天幕  
添つて……。  
天幕  
（改行ナシ）  
（改行ナシ）  
輪廓  
唇  
ばさばさと  
ねエ、





入るように、解されよう。学制の概念からいえば、高等女学校（または同相当課程。本作では「女学部」とも）を更に予科・本科に分けることは絶無とは言い切れなくても極めて珍らしかろうから、この学園は高女課程が中心なので小学校課程は予科ともよばれたと解する方が、まだしも穏当かと思われる。また、修業年限の点から云っても、当時の高女は五年又は四年が原則（大正九年に高等女学校令改正）だったから、予科イコール小学部ならばその上の本科即ち高女課程が四年（初出形）でも五年（全集形）でも年数上の不都合はないが（もともと京浜地区の有力校名門校は概ね五年制（——に移行中）だったから初出形だとその意味の不審は生じ、恐らくそれが改訂の理由かと思われる）、小学部・予科でその上の本科が五年（全集形）だと譬え予科は一年間としても六年制高女ということになってしまい、想像を絶する（だから初出形では予科・プラスなので、本科は四年にとどめ、全集形では予科の年数の食い込みをなくした上で、本科を五年に伸ばしたので、課程数と本科の年限が連動して総修学年限を制御しているのだ、——などというのは恐らく考え過ぎだろう）。

7 後の本文中に実際に登場するのは、初出本文でも全集形と同じく「昌三」（末兄）・「中の兄」・「大兄さま」の三人だけである。単純な錯誤か。

8 初出形ならば中の兄の言葉としてもよく母（次行で登場）が割り込んだと見てもよいが、全集形だと母の言葉とはとり難くなるう。

9 恐らく単純な誤読から生じたルビで、校訂上では問題にもなるまいが、初出本文の校正の精度を量る目安としては注意に値いしようか。

10、11 山川弥千枝の遺稿集の題名は、初出誌（『火の鳥』昭8・6）でも初刊本（沙羅書店版、昭10・9。次の甲鳥書林版は昭14・12刊

だから時間的に「乙女の港」の登場人物は矚目し得ない）でも「薔薇は生きてる」。即ち「乙女の港」では初出時に一個所のみ正しく表記しているわけで（従って、恐らく誤植による怪我の功名だろうが）、原稿の杜撰（と云える）としては度を越しているとも謂えよう。作者川端はこの遺稿集を初出直後の文芸時評（昭8・7・1『読売新聞』、8・7『新潮』）で好意的にとりあげ、創作「禽獣」（8・7）でも本文末尾で主人公の救済に用いている程だから、後述する引用本文の改竄と合わせて、不可解と云っておく（但しついでにいうと、本書「薔薇……」は文学史的記述に於てもかなりぞんざいな扱いが定着しているようで、例えば『日本近代文学大事典』は第三巻で『火の鳥』の特集と甲鳥書林版のみを記して初刊を落し、第五巻では題名を「……てある」と誤記、高見順『昭和文学盛衰史』でも初刊を落し、三十七巻本『川端康成全集』第二十巻（本稿で「乙女の港」の定本と做した）の解題も題名誤記のうえ初刊を落して、まるで登場人物も作者も二年後に刊行される甲鳥書林版を幻視したかのような説述になっている）。

「乙女……」での引用に全集形と初出形とで異同がある個所は、原典といふべき右沙羅書店版（時間的にこの版しかありえないことは、前述。さらに「赤い水玉模様の表紙」（57ペ）としているのもこの版の実物に合致する（甲鳥版は然らず））ではそれぞれ以下のようになっている。（49ペ4行目〜14行目参照）。

おこして／来ちやう／なほさなきやあ、／おこしてよ。／（行間  
○印入ル）／ねつてば）／（行アキナシ）／「あー」／抱きしめ  
てくほしい。

なお右の他、「乙女……」の両本文（での引用）の間には異同はないが共に、原典本文とは異なっている、という部分があり、その部分の原文は次の通り。

- 気がせくく、おきたいく。(49ページ目参照)／なほるか  
も知れぬ(同)／……なれないのよ。私はやさしくないのよう。  
ねつてば(49・11)／あ、私、こんなに甘つたれて(49・12)  
／やわらかい絹の(同)／やわらかそうなひざを見ると(、ナシ)  
(同)／ひざにさわる。又は袂にさわつて(49・13)／美しいば  
らさわつて見る、つやくとつめたかつた。ばらは生きてる(50  
・7)
- 12 『軽井沢町志・歴史篇』(昭29・8刊)に、皇女和宮の東下と明治  
十一年の天皇の巡幸の際の奉迎準備に関連して、現「お水端」の  
湧水を「御膳水」に選定使用した、とある。
- 13 全集本文では同字繰り返し返しの二字目がちようど行頭に來ているた  
めかと思われる。
- 14 単純ミスとしか考えられない。
- 15 「この学校は四年制で」の誤植か。
- 16 「駈けつげながら」の誤植か。
- 17 この号掲載分はルビ「けいこ」、前号までは「つねこ」。
- 18 初出は概ね「競争」だが、152ページ目のように初出も「走」の個  
所もある。
- 19 初出形でも全く意味が通じないことはないが、恐らく誤植である  
う。
- 20 初出形のルビは「テント」と「てんまく」と、個所によって二種  
類ある。
- 21 初出形もここ以外は「駈」。
- ※補註 少女小説という性格上通常のモデル考は場違いだろうが、読  
者(とくに、地元「横浜地区の」のイメージという意味で巷間に伝  
えられて来た横浜紅蘭高女(現横浜雙葉中・高)の「適・否」を点  
検すると、60ページ・126ページに「専修科」が付設されているらしい旨がみ

えるが本作連載開始当時横浜市内の私立高女六校中「専攻科」(高等  
女学校令での課程名は専攻科)を付設していたのは神奈川高女・横  
浜高女・横浜紅蘭の三校で、うち、フランス系のカトリックのミツ  
シヨンスクウル(17ページ)は紅蘭のみ。また、修業年限からいうと  
全集形Ⅱ初刊本での(五年)制は紅蘭と鶴見高女(いうまでもなく  
仏教系)のみ(以上、文部省普通学務局編『全国高等女学校・実科  
高等女学校二関スル諸調査』昭11・12各年度版に拠る)。これだけ限  
定的な条件を付して設定されると横浜近辺の読者(女学生又は女学  
校進学直前年齢層)は恐らく(あの学校だ)と極め込んだ(極め込  
み得た)ろうし、近隣でなくても、(どこか)実在の特定校——フラ  
ンス系カトリックのミツシヨンという点にしる、全国八百余の高女  
中約三十校にすぎなかった専攻科付設という点にしる——がモデル  
?という想像く憧れと詮索は、かなり自然に醸成されたろう。

なお、連載終了翌月刊の初刊本で、という、慌ただしい(修業年  
限)の変更(このことは直接実業之日本社版初刊本の現物について  
確認した)は、単に(お嬢様学校)にふさわしくグレードアップし  
ただけととっても納得出来ないわけではないが、或いはその他に、  
下請け的執筆協力者だったらしい中里恒子氏(小稿『乙女の港』・  
その地位の検証、本『紀要』十七号)の経歴も多少影響しているか  
も知れない。氏は大正十一年紅蘭に入学、十二年の震災後川崎高女  
に転じたようだが(中央公論社版『全集』十八巻付載年譜(岡宣子  
氏)。但し日本近代文学大事典は転校先を神奈川高女とするが、ど  
ちらでも以下の推論には支障はない)、川崎高女は(神奈川高女も)  
当時も本作の時点でも四年制。一方、紅蘭は当時はまだ高等女学校  
令に拠つて(高女として認可されて)いなかった模様で(同令に準  
拠する学校とした場合宗教教育が禁止されること等を忌避して長く  
高女令に拠らなかつた「名門校」は少なくない。紅蘭は前引『諸調

「査」に拠れば昭和七年十二月「設置」のこの時点ではじめて、高女令に拠ったか？、中里氏に明確なモデル意識がもし無かつたら、校風は紅蘭が頭に在っても修業年限の方は自身の卒業体験である四年制（川崎高女又は神奈川高女の）をなんとなく採ってしまった——ということも、絶対有り得ない不自然という程ではないのではないか。そして連載開始後、読者等の予想外の「モデル」視や一般的な五年制化の趨勢に気づき、単行本化の機会を待っていた（連載途中で突然学年を変えるわけには行かないから）、——といったことも。

以上、まったくの可能性にすぎないが、中里氏自身紅蘭在校歴あり、なのに何故「誤・設定」？という不審に対して、それが起り得る論理を述べた。

【付記 刊本全十章の最終章に対応する部分の掲載誌、昭和十三年三月月号は、現在、所在探索の方途も尽きた状態にある。甚だ遺憾乍ら本稿末尾に「未」完と記すことさえも憚られ、いつか僥倖に恵まれたなら別稿として追補することとしたい。 平6・4・16】

#### 【付記の2 「魔風恋風」論訂正の事】

ここに誌すのが適切と考えているわけではないが、情報の側の都合だけでいえば受取ってほしい人に伝わる可能性は或る程度期待し得るかと思われるので、敢て。

本稿筆者はさきに本『紀要』二十二号（平5・9）掲載の『「魔風恋風」・幻の《義姉妹》考』で、8頁下段16行目に、田村俊子「あきらめ」での（女子大学）のモデルが日本女子大学校（当時）と解される根拠の一つとして、

女主人公の止宿先の牛込笹筒町から徒歩通学が苦にならないらしい距離（―位置）に在り、

云々とした。刊本本文第一章で下校の途についた女主人公が次の第二章冒頭で止宿先の近所として、「笹筒町の広い通り」を歩いており、そ

の間に徒歩以外の交通機関を用いたという記述がないので、他の複数の根拠からも示唆される日本女子大の、現実の所在地に程近い「笹筒町」＝牛込笹筒町と速断したのだが、じつはこと別に、十三章末尾や三十章に、女主人公が出先から「麻布へ帰った」と繰り返されている。全篇を通じて転居などはしていないから、前出「笹筒町」は（麻布）笹筒町＝現港区六本木一・三丁目であって「（牛込）笹筒町」＝現新宿区内同町ではないことに議論の余地はない。そうと決まって読み返せば前引一章末にも学校を出た女主人公が

派出所の前を通つて電車の方へと向きを取る。

という一文があり、電車利用の暗示ともとれなくはない。しかし電車利用が普通である距離関係という示唆だけでは現台東区根岸三丁目一番の「（下谷）笹筒町」も有り得、書き方が不親切、と、自分の粗忽を棚に上げて愚痴りたい気持は残る。

とはいえ、前稿が明白な誤記なのは如何ともし難く、ここに訂正して前稿の読者にお詫びする。猶、頃日上梓した『考証少女伝説』（有朋堂）所収稿では既に訂してある。 平6・7・6】